

提 言

グローバル化—本当に大切なこととは

小田 慈 (岡山大学病院小児血液腫瘍科・大学院保健学研究科教授)

最近, “グローバル化” という言葉が, マスコミによく取り上げられます。日本の若者は今, 内向きになっている, 留学を目指す若者の数が減っている云々が, 毎日のように取り上げられています。このままでは, 世界から取り残されてしまう, 文化的にも, 学術的にも, という論調になってしまいます。行政や教育サイドも “グローバル化” のもと, 若者たちを教育し, 世界に通用する人材を育てよう, 育てなければ, という大合唱になっていきます。英語教育をしっかり行い, 英語に堪能な若者を増やし, また企業でも, 公用語を英語とするようなものが現れ, このことが国際的な競争力の源のごとく捉えられてしまいます。まるで, 英語が軽やかにしゃべれないと国際的になれないといったことになってしまいます。子どもたちは幼いころから英語の学習塾に通わされ, 小学校から血眼な英語教育にさらされます。大学に進学すると, 更にこの風潮は高まり, 入学時の英語力の評価を外部委託によって行い, 教養教育のクラス分けを行う大学すら出てきます。



私は, 米国の高校で学び, 卒業するという機会を45年前に与えられました。当時, 私がホームステイしていた家族は, 日本に帰国後, 幾度か, デンバーを訪れた私を, 必ず “He lived with us” と, 周囲の人々に紹介してくれました。決して “stay” ではありませんでした。当時の米国はベトナム戦争の真っ最中で, キング牧師や, ロバート・ケネディ上院議員の暗殺事件も起きました。さまざまな出来事を言葉も違う異文化の国で経験したこと, それらは, 今の私にとって人生の糧といってもいい源になっています。

今, 思い返すと, 当時の, そして, 今も友人である多くの人々は, お互いに相手の言うことを一生懸命理解しようと努力していました。多民族, そして多言語の国に暮らす人々です。単に英語ができるということではなかったと思います。

確かに, 英語教育を幼いころから始め, 英語に堪能な若者に育て上げるのは大切と思います。ただ, 現在 “グローバル化” の名のもとに行われている英語重視の発想はあまりに表面的なことにとらわれているように思われます。本当に大切なことは, 単に英語が喋れるということではなく, 相手の言っていること, 考えていること, 心の中を必死で理解しようという気持ちと行動力を持つことの重要さを, 若者にしっかり伝えることではないかと思えます。このことは, 医療, 保健, 福祉のあり方にも通じるものがあると思います。

“グローバル化”, この一言についても, いろいろと考えさせられるものがあります。本質を見失ってはならないと思います。